

---

---

## 注釈（伊丹と落語）

---

---

### 注 1 東の旅

古くから親しまれた上方落語の連作長編シリーズである。

[東の旅発端] → [七度狐] → [鯉津栄之助] → [うんつく酒] → [常太夫義太夫] → [軽業] → [軽業講釈] → [三人旅浮之尼買] → [軽石屁] → [矢橋船] → [宿屋町] → [こぶ弁慶] → [三十石]

という演題で進み、場面は、大坂から始まり、奈良に出て、本街道を伊勢まで行く噺で続く。伊勢からは鈴鹿を通過して琵琶湖に出て京都から大坂に戻ることになる。

### 注 2 行基鮒の伝説

天平の昔、僧行基が昆陽池のほとりを通ると一人の病人がいて、今に鮒を

焼いて食べようとして既に反面焼いていた。これを見た行基はその鮒を病人から貰い受け

昆陽池へ放してやり病人は布施屋でめんどうをみた。そして後年その鮒が昆陽池に繁殖して行基鮒といわれるようになった。

『古今著聞集』 ……………1254 年

『摂州有馬温泉記』 ……………1621 年

『摂陽群談』 ……………1701 年

『有馬温泉寺縁起由来』 ……………1728 年

『諸国里人談』 ……………1743 年

『摂津名所図会』 ……………1748 年

### 注 3 「昆陽大池殺生禁断之立杭」(写真1)

右は往古より御座候而朽損候節は昆陽村より御断申上、寺本村・昆陽寺より仕替来り申候

『昆陽組邑鑑』(伊丹市立博物館)

### 注 4 清酒発祥の地

「清酒発祥の地」碑(写真7)は伊丹市鴻池にあり、近くの鴻池稻荷に鴻池家由来を記した碑がある。

鴻池稻荷祠碑(伊丹市指定文化財)(写真2)

鴻池山中氏の富は、醸(じょう)を以って興るなり。

慶長5年より今に至るまで殆ど二百歳、而して醸すたれず。

その祖を幸元という。けだし鹿之助幸盛氏の孫という。

はじめて「もろはく すみざけ」を造り、おおいにウル。

やしきの後ろに大池あり、鴻池という。

### 注 5 うんつく

知恵の足りない者を卑しめていう語。まぬけ。あほう。うんつくは運尽と書き、「運尽くれば知恵の鏡も曇る」(貧すれば鈍する)『俚言集覧』ということわざから、上方言葉で阿呆、野暮の意味が付いた。したがって、「ど運尽く」は大馬鹿。「ど」は上方の罵言なので、本来は江戸落語にない語彙で上方落語のものが、そのまま残ったのであろう。ところが、後にはこれをもじって、本当に「運付く」で幸運の意味が加わって、ややこしくなっている。